

2026

5

令和8年5月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻393号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とろろ



さわやか福祉財団



公益財団法人
さわやか福祉財団



2026年度 全国交流フォーラム 開催のお知らせ

2026年7月13日(月)

当財団の「新しいふれあい社会づくり」をご支援いただいている皆様と一堂に会し、幅広い情報交換と交流を目的とした今年度の全国交流フォーラムを開催いたします。

(写真は昨年の全国交流フォーラムの様子)



概要

- 第1部 さわやかフォーラム** 事業報告、トーク等
第2部 さわやか交流会 交流パーティー

会場

東京ガーデンパレス

(東京都文京区 / JR・地下鉄「御茶ノ水」駅等最寄り)

●会場が例年と違いますので、ご注意ください。

参加費

- 第1部：無料**
第2部：運営協力金として2,000円 (当日受付にて)

- 詳細は決まり次第、財団ホームページに掲載いたします。
- さわやかパートナーをはじめとするご支援者の皆様には、別途案内状を郵送いたしますので、お申し込みはそちらをご利用ください。

お問合せ 電話 (03) 5470-7751 (担当：中村)

皆様のご参加をお待ちしています!

とあ言おう

2026年5月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

改めて行政の本気度が問われる 助け合いの地域づくり

清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

思いひとつで活動スタート 地域のつながりを大切にする温かい支援

生活支援そよかぜ (千葉県東金市)

10 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう

地域の中にある特養ホームで みんながハッピー「赤ちゃん職員」

社会福祉法人もやい聖友会 银杏庵穴生倶楽部 (福岡県北九州市)

18 新 シリーズ 定年、その先へ 東京都江東区 実践ルポ 1

「よっちゃん家」の取り組みから 地域は、新たな自分に出会える場所

一般社団法人地域コミュニティ振興協会代表理事 肘井 哲也

新しいふれあい社会づくりに向けて

- 14 「地域助け合い基金」
助成先のご紹介 / 状況のご報告
- 22 ご支援ありがとうございます。
さわやかパートナー (賛助会員)・
ご寄付者の皆様のご紹介
- 23 NEWS & にゅーす
- 25 活動日記 (抄)

- 20 <コラム> 脳卒中カフェの取り組み
(山形県天童市)
- 39 日本老年医学会学術集会開催のお知らせ
- 40 「地域助け合い基金」に関するお知らせ
- 41 みんなの広場 / 投稿募集

改めて行政の本気度が問われる 助け合いの地域づくり

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

各地で講演を行う際に、併せてグループワークを行うこともある。このグループワークとは、6〜8名くらいずつテーブルに分かれて、いくつかのテーマで意見を出し合い、話し合ってもらうもの。住民の皆さんを対象に行うフォーラムやシンポジウムであれば、講演後にたとえば、「どんな地域に住みたいですか?」「どんな助け合いが身近にあったらいいと思いますか?」「自分ができることは何ですか?」などをテーマとして話し合ってもらおうことが多い。1時間程度から長い場合は半日近くかけて行うこともある。

住民同士、意見を自由に出し合ってもらいながら、皆で地域の実情を踏まえて、将来に向けた住民参加の支え合いのあり方を考えていくこうした取り組みは、各地で以前から様々に行われている。その目的は、地域での生活上の課題を改善して、困りごとを助け合い、少しずつでも暮らしやすくする。そして本人自身が地域の中でいきがいを生み出すためのものだが、そもそもどのような答えがよいか、住民の取り組みに最初から正解はないし、一度の限られた時間で解決するものでもない。後日さらに進めていくための土台づくり、いわば「やる気スイッチ」を押し意識醸成の機会でもある。

地域のつながりが希薄になってきている今、こうして皆で和気あいあい、賑やかに意見を出し合い、考えた内容をグループを越えて全員で共有する場を持つこと自体が大きな意味を持つ。どんな意見も否定せず、前向きに自分事として話し合うことが大前提となる。グループの進行役は、生活支援コーディネーターをはじめ地域づくりに関わる人たちが担うことが多いが、こうした会合に初めて参加した人の意見もうまく引き出しているなど感心することも多い。

そんな中、ある時、こんな声が聞こえてきた。「最後は自分は施設に入るつもりだから」「助け合いといってもできることは限られているし、もっと行政が公的にやらなくてはだめ」。議論にも積極的ではないが、その人それぞれの考えであり、否定することはできない。こうした意見は以前から根強くあり、不安が背景にあるから住民の人たちの発言には驚かないが、自治体関係者がその意見をそのまま肯定したときはさすがに驚いた。国の財政ひっ迫や専門職人材の不足がますます深刻な課題となるこれから、なぜ住民に助け合いの参加を地道に働きかけることが不可欠なのかの理解が進める側に未だ浸透していない。全体発表の際に会場の参加者全員に尋ねてみる。近くの高齢者施設を知っていますか、行ったことがありますか、また、自分の自治体の財政状況は潤沢だと思えますかというように。答えはだいたいほとんどがノーだ。

高齢者施設についても具体的な情報を持っている人は案外わずかで、一般にも親の介護に直面して初めて実情を知ったという人のほうが多いだろう。自分の大切な最後の場として選択したいならなおさら、日頃から関心を持ち、地域連携の度合いなどを確認してみることもまた、地域の暮らしを考える入口になる。施設も支え合いの大切な資源と可能性として考えてみよう。と整理させてもらったところ、当事者の真剣さが大きく変わった。住民への働きかけは確かに苦労が大きい。だからこそ、何よりもその価値を信じる関係者の本気度が改めて問われている。



思いひとつで活動スタート 地域のつながりを大切に する温かい支援

生活支援そよかせ（千葉県東金市）

4月号では、東金市の生活支援体制整備事業から住民が自分事として活動をはじめた事例を紹介しました。今月号は、同市内で制度ではなく自らの思いを原動力に集まった有償ボランティアグループを紹介します。支援を必要とする人のニーズに柔軟に対応する「生活支援そよかせ」（以下、そよかせ）による、心が通じ合う活動を取材しました。

（取材・文／石橋 千春）

制度があっても
困っている人がたくさんいる

東金市の日吉台地区には、2016年にオープンした「まちの保健室・メ

デイカルカフェ」があった。立ち上げたのは、後にそよかせの副代表となる能戸孝子さん（75歳）。元看護師で現在ケアマネジャーでもある能戸さんは、そのカフェで身体に不安を抱える人た

ちの相談に乗ったりアドバイスをしてきた。ここには住民だけでなく、医療や高齢者ケアの関係者も集まっていた。

そんなある日、かねて親しかった介護福祉士で在宅ヘルパーの元澤昭子さん（76歳）がカフェにやってきて、能戸さんに相談を持ちかけた。

「介護保険があっても、日常生活で困っている人たちがたくさんいるでしょ。それを何とかしなければならぬと思いませんか、この日吉台から始めてみない？」。現場の中から出た切実な声だった。



取材にご協力いただいた皆さん。前列左から平野さん、元澤さん、川辺さん、後列左から海田さん、能戸さん、木内さん、鈴木さん、高野さん

「元澤さんの思いを聞き、その熱意に触れて、これはやったほうがいい」と

思いました」と能戸さん。元澤さんを代表にボランティア活動を始めることにした。

そのためにはまず、地域の現状を知る必要がある。2人は、カフェの仲間でもあり、市内で09年から無償のボランティア活動を展開していたナルク（NPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ）東金の川辺美恵子さん（81歳）や平野篤子さん（65歳）に相談。他のナルク東金のメンバーも数人加わって、運営方法や地域のニーズや活動について話し合い、新たな活動の模索を始めた。そして17年7月、有償ボランティアのそよかぜを立ち上げることとなった。

当時のメンバーは8人。前述の4人のほかに、保健師として市役所に勤めていた木内弘子さん（71歳）、NPO法人の相談支援専門

員である安川優子さん（71歳）、民生委員の松本桂子さん（80歳）、生活困窮者自立相談支援員である岡幸子さん（65歳）が加わった。助け合い活動には心強い仲間たちだった。

翌年にはそよかぜの設立総会を開き、以降毎年の定期総会には行政も参加している。このような関係性から、運営に行政からの活動補助が出ることもなった。

「話し相手」活動とは？

現在、メンバーが26人に増えたそよかぜでは、日常的な掃除や買い物代行、庭の草取り、ごみ出しなどを中心に活動しているが、その支援内容特徴づけているのは、利用者に合わせた柔軟な対応だ。例えば「話し相手」の活動。助け合いの場で利用者が明確に「話を聞いてほしい」と言うことはあまりな

いかもしれないが、そよかぜでこれが始まったのは、ケアマネの能戸さんのアレンジ力によるところが大きい。

元澤さんが話し相手の担当となって、北川次恵さん（71歳）宅を訪れるようになったのは4年前。北川さんは、寝たきりの母親（101歳）を自宅で看取りたいと長年介護していた。その疲弊した様子に、担当ケアマネだった能戸さんが心のサポートも必要と判断し、そよかぜの運営会議で相談して元澤さんを紹介したのだ。元澤さんはベテランのヘルパーだから介護の悩みを聴く相手として適任だし、2人とも手先が器用でものづくりが大好きという共通の趣味もあった。これらがマッチングの決め手となった。

実は北川さんは、「能戸さんから勧められたとき、ただでさえ介護で大変なのにまた時間を取られるの？」と戸惑ったという。「でも、元澤さんが得

意な折り紙を持ってきて趣味の話をしたり、ミシンで作った手芸品を見せ合ったりして。そのうちにおいしいお店の情報交換もしたりして楽しくなってきました」。介護についても「元澤さんはプロだから安心して愚痴がこぼえるし、全部受け止めて理解してもらえ



元澤さん（左）と北川さん（右）。
北川さん宅にて楽しいひととき

る」。今では身内より気が許せる仲間とか。

元澤さんにとっても「ここに来るのが楽しみ」な訪問になり、月1回1時間だが、時には時間を過ぎてしまうこともあるほど。

そよかぜでは、ほかに買い物代行やごみ出しの後に少し時間を取って利用者のお話し相手となることもある。流れの中でお互い自然に話ができれば、抱えている悩みや不安、孤立の解消にもつながるだろう。

制度でできない手助け

料理研究家として今でも教室を開くほど元氣な佐瀬智恵子さん（94歳）は、息子さん（71歳）との2人暮らし。脚をけがして動きづらくなったので、「お掃除に来てほしい」とそよかぜに依頼したのが8年前。当時は要介護の認定



そよかぜメンバーで佐瀬さん宅を担当している伊藤眞佐子さん（後方・66歳）と佐瀬さん（手前）

もなかったが、その後、心臓の手術をして現在は要支援2だ。介護保険サービスも使えるが、息子さんが同居していることもあり掃除支援には制限がある。今は週1回1時間、長年通うそよかぜのメンバー2人が交代で掃除を支援している。

「介護保険は、それはダメ、ここはできませんと面倒でしょ。そよかぜの方なら気心も知れているし安心してお任せできる」と信頼は厚い。

買い物物の後に江口さんとおしゃべりしていると「窓のカーテンがボロボロになって使えないから、毎晩雨戸を閉めている」ということが分かった。元澤さんは「江口さんの暮らしが少しでも豊かになるなら」と思い、ご本人の了承を得て新しいカーテンとカーテンレールを買ってきて、メンバー2人で5間ある窓に取り付けた。きれいになった窓を見た江口さんは、「これでやっと人が住んでいる部屋の窓になった！」

地域包括支援センターや事業所のケアマネから依頼されるケースも多い。農家で広い一軒家に1人暮らしをする江口康彦さん（91歳）もその1人だ。元澤さんが担当になり、はじめは買い物物を代行していたが、ある日、

と大喜びしてくれたという。

明るい表情の江口さんを見て元澤さんも「やってよかったなあ」と思った。

「思い」の活動に 頼れるメンバーも加わって

そよかぜに19年から参加して事務局長を務める海田明さん（71歳）は、城西国際大学千葉東金キャンパスの「シア・ウェルネス大学」の1年コースと一緒に受講した元澤さんや木内さんから誘われ、卒業後の活動として参加することにしたという。現役時代は営業職でパソコン操作に長けていることもあるが、「思い」で行う活動を継続可能な仕組みとして整える役割を担っている。

そよかぜでは月1回、8人の中心メンバーで運営会議を開き、運営の報告と課題などについて話し合う。海田さんは「新しい活動内容が加わるときは、



江口さんは週1回の買い物代行をそよかぜに依頼。
馴染みの元澤さん(左)と江口さん(右)



新しいカーテンが丁寧に取り付けられた江口さんの自宅

会議の場で共有してから実行するプロセスが大切」と話す。日常的な困り事のサポートでも、トラブルが起きたり危険を伴うこともあるので、定期的に研修会を開き、新しく参加した人には講習を受けてもらう。

「私たちがいろいろな経験して学んできた。教えてもらいながら助け合う姿勢が大事」とも。介護保険制度の勉強会や講師を呼んでの口腔ケアや嚥下体操、災害時の避難方法などについても学ぶ機会を設けている。

また、メンバーみんなで作成した

「ボランティアの心得」の内容を守って活動している

る。「利用者
の立場を思い
やり温かく接
すること」を
第一に、依頼
された支援を
行うだけでは
なく、「心得」
には、訪問し
た際に「利用
者がどんな
状況にあっ
て」「何をし

てほしいと望んでいるか」「利用者の変化についても目を配ること」など細やかな気配りについて記してある。それが実践されているエピソードとしてこんなことがあった。

そよかぜでは視覚障がいのある1人暮らしの人をごみ出しで手助けしているが、昨年8月に訪れた際、何度呼びかけても応答がなかった。猛暑の中、その人はエアコンのない居間でぐったりした状態で横になっていたという。命に関わることなのでエアコンを設置するよう説得し、受け入れてもらうことができた。音声入力のリモコンは割高だったらしいが、「もっと早く導入すればよかった」と言ってもらい、メンバーたちは安心したという。

近くに住む誰かを気にかけて

「人は、まちや国の貴重な財産だと思

います。気づいた人たちが立ち上がって、行政にはできない困っている人たちのサポートができる。もっと若い人たちに参加してほしいけれど」と平野さん。新たな人材の確保はそよかげでも課題だが、昨年、海田さんが手作りの募集チラシをシヨッピングセンターに置いたら、2人の加入があった。鈴木達雄さん(75歳)と高野直人さん(73歳)だ。退職後、「地域とつながることを何かしたい」と参加した。そんな思いの人は、潜在的に地域にいるのかもしれない。

近くに住む誰かのことを気にかけてり手助けしたりする、このつながりのありがたさを実感する活動を最後に紹介したい。

そよかげでは、妻が施設に入所した後の1人暮らしの男性をずっとサポートしていた。その男性も亡くなり、県外から通っていたその夫婦の娘さんと

一緒に家の片づけを手伝っていたが、娘さんも体調を崩して通えなくなってしまう。しかし、定期的に届く郵便物などがありポストはいっぱい。それに気づいた担当メンバーが娘さんと連絡を取り、定期的に娘さん宅に郵送しているという。雑草に覆われてしまった庭の木の伐採や草刈りも、シルバー人材センターと連携して対応した。

昔なら親切なお隣さんがやってくれたことかもしれない。だが、地縁や家族の絆が薄れた今、お互いさまで助けてくれる人たちがそばにいるならば、こんなに心強いことはない。



「高齢者一人ひとりのニーズに合わせた柔軟な支援」「生活の質の向上と孤立防止を重視」「地域のつながりを大切にしたい温かい支援」の3つを活動の柱としている。

メンバー26人(うちコーディネーター6人)、利用者51人

<対象> 東金市に住む高齢者

<日常の困り事> 庭の草取り、ごみ出し、外出付き添い、話し相手、掃除・洗濯、買い物代行、食事作り その他

<利用料> 30分以内500円(事務費100円含)、1時間1000円(事務費200円含)

<サポートの流れ> ①電話を受けて困り事を聴く ②担当地域のコーディネーターが訪問して、支援内容や段取りの打ち合わせ ③活動者が訪問し、支援終了後、活動記録を利用者に手渡す ④利用料は月末にコーディネーターが利用者宅訪問時に受け取る

<受付・提供時間> 平日9～17時(時間、曜日は相談に応じる)

●連絡先/代表・元澤昭子 電話 090-3875-0159

いいきき わくわく

子どもと一緒に 地域で輝こう



地域の中にある特養ホームで みんながハッピー「赤ちゃん職員」

社会福祉法人もやい聖友会 銀杏庵穴生倶楽部（福岡県北九州市）

赤ちゃん職員のミッション、それは「特養ホーム内のお散歩」。応募資格は「うまくおはなしできないこと」で、定年は3歳ですが、それより前でも上手におはなしできるとなると、早期退職となりません。かわいい職員さんたちに会いに行ってきました。

（取材：文／塩瀬 潔泉）

● 赤ちゃん職員の仕事ぶり

JR黒崎駅からしばらく行くと、「社会福祉法人もやい聖友会」の法人本部と特別養護老人ホーム「いちようあんあのおくらぶ銀杏庵穴生倶楽部」の入る建物がある。海と山が近いこの一帯は、「鉄王」という地名の通り、昭和の高度成長期に製鉄会社の広大な住宅群があったエリアだ。今は一戸建てが立ち並び閑静な住宅街に変わり、その一角にあるのもやい聖友会である。敷地には門も塀もなく、建物の横には隣の公園とつながる遊歩道があり、誰でも座れるべ

ンチが置かれている。

赤ちゃん職員は平日の

午後、ご機嫌のいいときに出勤。仕事は、ホーム内を自由にお散歩するこ

とだ。給与はオムツで、

一緒に来るママはホーム

1階のカフェのドリンク

券がもらえる。出勤することに押されるスタンプ

が6個たまると、5階のパブリックスペースで毎月開催されているお昼寝アートの撮影会に無料で



銀杏庵で毎月開催されている撮影会でお昼寝アート



「きゅうよ」を用意して、赤ちゃん職員の赤ちゃん職員のママたちにも銀杏庵で交流が生まれる出勤を心待ちにする入居者

参加できるという福利厚生もある。

案内されてホーム4階のエレベーター前広場に行くと、入居者のレクリエーションが行われていた。ママと一緒に出勤した赤ちゃん職員も数名いて、レクの様子をママの足につかまっってじっと見ている職員もいれば、笑顔で呼びかける入居者のもとに走っていき抱きつく職員もいる。

入居者の居住スペースへ巡回に向かう赤ちゃん職員がいたので、後を追いかけるママに話を聞いた。

「お昼寝アートの撮影会に来たときに赤ちゃん職

員のことを聞いて、この子は生後半年くらいで入職しました。入居者さんが『かわいい、かわいい』と言ってくださるし、

同じくらいの月齢のお友だちもできました。私も家にいると退屈でしたが、親子みんなで集まって、1階のカフェでご飯を食べたりしてとても楽しいです。近所にこんなところがあったなんて、と思っています」

最近、我が子が歩くようになって、入居者から「あらく、歩けるようになったの」と声をかけられ、成長を見守ってもらえる、と笑顔だ。



住宅街にある銀杏庵穴生倶楽部



高齢者と赤ちゃんは非言語コミュニケーションで心が通い合うようだ

給与として渡すオムツを袋詰めして「きゅうよ」の熨斗を付け、赤ちゃんに手渡すのは入居者だ。「かわいい職員さんにまた来てほしい」という思いを込めて作業している。

●心が通い合う 言葉ではないコミュニケーション

銀杏庵で赤ちゃん職員の募集が始まったのは、2020年。新型コロナウイルスの感染が広がって間もない6月、もやい聖友会理事長の権頭喜美恵さんの長女の出産がきっかけだった。

「家にも退屈」と、長女が銀杏庵に生後1か月の我が子連れてきて、1階にベビーベッドを



社会福祉法人もやい聖友会の
権頭喜美恵理事長

置いて寝かせたところ、入居者たちが遠くから寄ってきてとても喜んだという。
「私自身、北

九州という知らない土地に来て4人の子育てをしましたので、ママたちの気持ちはよく分かります。赤ちゃんを見て入居者の皆さんがこんなに喜ばれて、ママたちも寂しい思いをしているなら、みんな赤ちゃんを連れてここに来たらいいじゃない、と思ったのです」と権頭さん。

間もなく「赤ちゃん職員」の募集を始め、これまでに延べ130人の赤ちゃん職員が活躍してきました。コロナ禍では緊急事態宣言時以外は活動を続けたが、感染対策をして感染者は出なかった。

「何もできないように見えるかもしれませんが、赤ちゃんはそこにいるだけでみんなを笑顔にできる素晴らしい存在です。そして、言葉を話せるようになる前の赤ちゃんも認知症の入居者さんにとっては、非言語のコミュニケーションは心が通い合っただけでもいいようですよ」

●人と地域のつながりを切らさずに

1階に降りると放課後の時間帯になっていた。エントランスにある駄菓子屋の屋台のまわりには、



銀杏庵の1階は、放課後の時間になると子どもたちの居場所に

小学生がわんさか集まっている。友だちとの待ち合わせにこの場所を使っている子、駄菓子を手手に数人でゲームで盛り上がる子たち。そしてその横を、赤ちゃん職員を抱っこしたママが通りかかる……といった具合だ。

5階のパブリックスペースでは、この日は小学
生向けの体操教室が行われていた。ほかにも銀杏
庵では、マンション
管理組合やPTAの
会合、フラダンス教
室など地域の人たち
が集まる機会には積
極的に場所を提供し
ている。
なかには、ここで
行われている習い事
に通い、ずっと後に
なってからここが特
養ホームだと知って
驚く、という地域住

民もいるそうだ。それほど、ここではさまざまな
人たちが当たり前に出入りしている。大人の職員
にも、子連れ出勤や「ばあちゃん（親）連れ出勤」
が認められていて、銀杏庵はみんなにとって生活
の延長線上にある場所だ。

銀杏庵を建設するにあたり権頭さんは、他の高
齢者施設は視察しなかったという。自宅にいるよ
うなホームを目指し、入居者の個室は畳敷き、廊
下の手すりもつかまりやすいように工夫したユニ
ークな木製にするなど、館内の隅々まであたたか
みが感じられる。

「人としての生き方がどうあるべきかを考え、高
齢者の皆さんには、施設に入居されてからも地域
や人とのつながりが切れないように生活してい
てほしい」と思っています。そのため銀杏庵は、
ここをひとつのまちとしてさまざまな世代が交流
できるようにしています」

まさに赤ちゃんから高齢者まで、すべての年代
が地域でつながり笑顔で暮らせるアイデアを、銀
杏庵で教えてもらうことができた。

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、医療職と子育て支援団体の協働による子ども食堂、生活支援の有償ボランティア、耕作地を整備した屋外の居場所をご紹介します。なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていきますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

茨城県つくば市

医療専門職と子育て支援団体が協力 クリニックで開催する子ども食堂

キッチン こん

助成金額 15万円

子育て世帯が増加する一方、移住者が多く地域のつながりが希薄になりがちだというつくば市。「キッチンこん」は2023年、医師、看護師、栄養士、理学療法士、作業

療法士、助産師などの専門職が、乳幼児の親子を対象に、地元のクリニックを会場として子ども食堂を立ち上げました。離乳食にも対応した食事とともに子育てに関する知識を提供し、医療職とのふれあいの中で参加者がさまざまな悩みを相談できる場所となっています。

今回の助成金は、炊飯器やトレーなどの備品と食材の購入、育児や発達に関する講演の講師料として活用されました。

参加した家族からは「子どもの発達について不安が解消された」等の声が聞かれたそうです。また、親同士の互助

関係も生まれ、地域コミュニティの拠点として認知されるようになりました。

一方、専門職だけで全員の困り事に対応するのは難しく、離乳食の調理にかかる時間なども課題となっていました。が、地域の子育て支援団体がキッチンこんの活動に共感し、調理を担当してくれることになったそうです。この協力により、専門性を生かした子育て相談と、子育て世代に近い環境で活動している団体のノウハウを生かした子ども食堂の運営が実現できました。

今後も地域と関わり合い、持続可能な支援をしていきたい、と報告をいただきました。



キッチンこんで提供される子ども用の食事

東京都青梅市

第2層協議体から活動立ち上げ ささえあいの有償ボランティア

調布地区ささえあい隊

助成金額 6万8000円

「調布地区ささえあい隊」は2024年に発足。制度でカバーできないこと、一人暮らし高齢者の増加や住民同士の関係の希薄化により対応できなくなったことを、地域で気兼ねなく助け合い、安心して生活できるよう有償の「ちょっとボランティア活動」を行っています。草木の水やりやゴミ出し、電球交換、買い物、将棋の相手、話し相手などに対応しており、活動が住民同士のコミュニケーション増加の一助にもなると考えています。

ささえあい隊は、第2層協議体「たまりば」での議論をきっかけにSCも支援して設立されたもので、その後も月1回の協議体で活動内容等について協議体で話し合っているということです。

今回の助成金は、ボランティアが活動時に装着する腕章や事務用品の購入、広報パンフレット作成、活動のための



調布地区ささえあい隊の活動の様子

保険料等に活用されました。

最初は少なかつた依頼件数も徐々に増加し、継続利用もあるというささえあい隊。一方で、依頼者のニーズが活動内容に合わない、または判断に迷うケースもあり今後の課題となっています。「近年失われつつある『隣近所のつながり』『お互い様の精神』を復活させ、地域全体に『ささえあい』の輪が広がってほしい」と報告をいただきました。



ヤギとふれあい、ガーデンテーブルに集って交流を深める広場の様子



無添加ごはんのこども食堂等の活動をしています。また、社協等と協力してひとり親家庭への支援も行っています。月2〜3回の開催で子どもから高齢者までが参加でき、天気の良い日にはヤギとふれあえる機会も設けて、いろいろな人が楽しめる居心地の

「かたつこFARM+」は、人・動物・地球にやさしいをコンセプトに、耕作放棄地を活用した自然栽培や収穫体験、保護ヤギとのふれあい体験

新潟県新潟市

子ども食堂、ヤギとのふれあい
みんなが楽しめる屋外の居場所づくり

かたつこFARM+

助成金額 15万円

「地域助け合い基金」状況のご報告

(4月15日) 当財団ホームページ開示時点

◎寄付受付額

437件 2億2259万2637円

このうち遺贈基金より1億8000万円を供出

◎助成実行額

1415件 2億1372万0749円

いい居場所づくりに取り組んでいます。公園に隣接した場所を地域の方からお借りし、季節ごとの自然を楽しみに訪れる人も多く、地域内外の交流拠点となっています。

今回の助成金では、ガーデンテーブルと椅子、ガーデンデッキ、草刈り機を購入。ヤギ広場に設置したことで、子ども食堂開催時以外にも休憩や交流の場としての機能が向上しました。訪れる人同士の自然な交流が生まれ、スタツ

フ以外の人が草刈り機で草刈りをしてくれたりという効果もあつたそうです。

今後はベンチ等を設置し、空間の充実を図るとともに、ヤギとふれあえる環境の拡充やイベント等を通じて、より一層人が集まり共に楽しめる魅力ある地域づくりを目指します、と報告をいただきました。

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、

およびクレジットカード決済は、
上のコードもご利用ください

基金に関するご意見・お問い合わせ

地域助け合い基金担当

電話：(080) 9277-4174

F A X：(03) 5470-7755

メール：

tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

「よつちゃん家」の取り組みから 地域は、新たな自分に出会える場所

（取材・文）一般社団法人地域コミュニティ振興協会代表理事 肘井哲也

定年後、自身の経験を生かして「人の役に立ちたい」と感じたことはないだろうか。あるいは、仕事から離れ、せつかく自分らしい時間ができたものの、「何から始めたらよいのだろうか」と戸惑ったことはないだろうか。

本連載では、東京都江東区を舞台に、地域活動に取り組む方々の具体的な事例を通して、定年後の多様な生き方と、地域と関わることの魅力をお届けする。

東京都江東区の東側で江戸川区に隣接する東砂地域に「多世代交流の里 砂町よつちゃん家」がある。よつちゃん家は吉野義道さん（86歳）が中心になって2016年に立ち上げた古民家を活用した多世代交流の居場所であり、様々な活動が毎日繰り広げられている。

吉野さんは、民生委員・児童委員および保護司として

約25年間活動し、さらに町内会長を9年間務め終え役職を一通り終えた。やり尽くしたという思いもあったが、「地域のためにまだ何かできるのではないか」という拭いきれない感情が心の奥に残っていたという。

当時、砂町地域では小型・中型マンションの建設が進み、新しい世帯の流入が続いていた。その一方で、従来のご近所付き合いは希薄化し、地域のつながりが弱まっていく傾向が見られた。そうした状況を目の当たりにし、吉野さんは「自分にしかできない地域福祉があるのではないか」と考えるようになった。

そこで思い至ったのが隣接する空き家の存在である。そこはかつて両親が暮らしていて使われていない状態であった。この場所を地域のために活用できないかと模索した。そうした中、地域の区議会議員から、文京区本駒

込で空き家だった古民家を地域のために活用している
「こまじいの家」を紹介された。吉野さんは民生委員仲
間や近隣住民ら約10名とともに見学に訪れた。そこには
子どもから高齢者までが自然に集い、地域住民自身が主
体となって運営する居場所があった。子ども食堂や交流
の場など、多様な活動が展開されており、世代や立場を
超えた関係性が育まれていた。その姿は、吉野さんたち
が漠然と描いていた理想と重なり、「まさにこれだ」と
いう確信につながった。

この見学を契機に、一気に具体化した。民生委員や保
護司の仲間に加え、ボランティアセンターを通じて集ま
ったメンバーなどが参加し、2016年10月、「よっち
ゃん家」は開設された。吉野さんが77歳の時である。

立ち上げ当初は、週2回の誰でも気楽に立ち寄れるサ
ロンとしてスタートした。その後子ども居場所づくり、
子ども食堂、シニアサロン等へ活動が広がっていった。

吉野さんの活動の根底にあるのは、「親の代から暮ら
してきたこの地域を、人と人がつながり、助け合える、
もっと住みやすいまちにしたい」という思いである。と
くに吉野さん夫妻は、未来のある子どもたちに自然と目
が向くという。子どもたちには、家族だけでなく、地域

の様々な世代の人と関わりながら育ってほしい。そんな
願いから、よっちゃん家は「多世代交流の里」として活
動を続けている。その思いに共感して「ここで何かやり
たい」と思う人たちが自然と集まってきたのである。

保護司仲間の一人、大場洋子さんは、以前から温めて
いた子ども食堂の活動をここで始めた。大工仕事の経験
がある人は必要な棚や遊具を手作りし、元喫茶店のマス
ターはカフェの場づくりを担う。現役世代の参加者が子
どもたちの学習を見守ることもある。それぞれが自分の
できること、得意なことを持ち寄りながら関わっている。
よっちゃん家の魅力は、誰もが自分の経験や力を自然
に生かせる場所であることだろう。無理なくできること
を持ち寄ることで、人がつながり、新しい活動が生まれ
ていく。よっちゃん家は、そんな地域のつながりを育て
る場として、多くの人に支えられている。

次号では、「よっちゃん家」で実際に行われている具
体的な活動事例を紹介する。

(ひじい てつや) 東京都江東区・江戸川区、横浜市港北区を中心に地域の
社会活動等に幅広く関与し、シニア、高齢世代向けの地域活動情報紙「えが
お」、地域の共生社会活動をテーマにした「みなたらすPREES」を発行
する。認定NPO法人キッズドア理事、贈答品会社株式会社東香代表取締役。

安心して語り合える 脳卒中カフェ

「助け合い体験ゲーム」で思いを共有

山形県天童市の「ミロク脳神経リハビリクリニック」（齋藤佑規院長）の作業療法士・武田浩祐さんから、「脳卒中カフェ」について情報をご提供いただきました。

当クリニックでは、脳卒中を経験された方やそのご家族、支援者の方々が気軽に集える場として「脳卒中カフェ」を開催しています。

脳卒中を経験されると、後遺症により「話すのが怖い」「外に出るのが不安」といった心の壁が残ることがあります。そこで本カフェは、単なる情報提供の場ではなく“みんなの居場所”となることを目的に、「学び＋交流＋笑顔」を大切にしながら、安心して語り合える場を目指して企画しました。

昨年11月のカフェでは、参加者の自己紹介や近況報告に続き、私が第2層協議体立ち上げを目的とした「天童中央・成生地区ささえあい勉強会」で出合った、さわやか福祉財団の「助け合い体験ゲーム」を実施しました。

ゲームを通して「支える側」「支えられる側」という立場を越え、それぞれの



脳卒中カフェでの「助け合い体験ゲーム」の様子

困り事や思いを共有できました。「自分が困ったとき、どのような声かけがあるとうれしいか」といったテーマをもとに自然と対話生まれ、参加者同士の距離もぐっと縮まりました。

参加者からは、「自分に障がいがあっても人の役に立てることがあると気づいた」「また参加したい」と

いった前向きな声が多く聞かれました。

脳卒中カフェは、医療の場を越えて地域での助け合いを広げていききっかけづくりの場でもあります。これからも、誰もが安心して集える“みんなの居場所”として、笑顔あふれる時間を重ねていきたいと思っています。



今年4月開催の脳卒中カフェでは、皆さんでお花見へ

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

- **NEWS & にゅーす**

- **さわやか活動日記**（抄）



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2026年3月1日～3月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合があります。ご了承ください。

さわやかパートナー個人 (52件)

(都道府県別50音順)

北海道	関根 美那子
野口 道雄	中崎 朱美
岩手県	濱田 純一
大久保 孝信	千葉県
宮城県	高柴 正義
内海 春雄	藤本 政子
山形県	三石 治子
高橋 政春	渡辺 誠
栃木県	東京都
山田 智子	有馬 正史
群馬県	井嶋 一友
篠原 宏子	井上 敦子
埼玉県	小滝 義浩
今村 和喜子	香川 昇

紙透 由美子	神永 光男	川井 信義	小西 達朗	下川原 直明	菅尾 尚彦	永島 崇子	芳賀 勝子	山田 秀之	山寺 博丸	神奈川県	井上 達也	川尻 富士枝	木村 利雄
--------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	--------	-------

坂口 松代	川瀬 庄平	広島県
杉山 静枝	京都府	濱崎 雄司
中野 曹一	古海 りえ子	山口県
山梨県	大阪府	清水 博
鶴田 秋生	光吉 順子	香川県
長野県	兵庫県	大藪 知恵子
井出 清子	桑山 信子	高知県
愛知県	中村 保佑	中平 由起子
北島 映子	森本 勝之	西元 和代
宮地 良和	奈良県	福岡県
滋賀県	丸山 式子	佐藤 須美子

さわやかパートナー法人 (5件)

(50音順)

草野産業株式会社
NPO法人芸南たすけあい

NPO法人市民助け合いネット
有限会社藤樹
日本地震再保険株式会社

一般ご寄付 (4件)

(50音順)

緒方 璋 (5千円)
加藤 由紀子 (5万円)
丸山 式子 (1万円)
吉田 旭雄 (1万円)

地域助け合い基金ご寄付 (1件)

妹尾 信二 (3万円)

NEWS

& にゅーす



第42回理事会を開催

第42回理事会が、3月18日午後1時半から東京・丸の内中央ビル内会議室で開催されました。理事7名、監事2名、顧問1名が出席し、定款に基づき清水肇子理事長が議長を務め議案の審議に入りました。

まず、清水理事長から2026年度の全体説明および事業計画について説明し、

鶴山芳子常務理事が地域の状況の補足説明を行いました。

人口減少と高齢化がさらに進む40年に向け、助け合いの環境づくりの重要性は一層高まっていることから、26年度の事業については、社会環境の変化と制度の動向を踏まえつつ、地域共生社会の実現に向け、人と人とのつながりの再構築を基盤とした助け合いの仕組みづくりを全国に広げ、事業の深化と発信の強化を図る方針が示されました。事業構成は、25年度と同様に公益目的事業の3区分（1・ふれあい推進事業、2・社会参加推進事業、3・情報・調査事業）全14プロジェクトとし予算も概ね同水準としていること、ただし調査政策提言分野については、京都大学との連携による助け合い活動の社会的インパクト評価研究や、ウェルビーイングに関する研究等、取り組みを強化するとの説明がありました。生活支援体制整備事業は10年を経て住

民参加の仕組みは広がったものの、行政の理解や伴走支援体制の違いにより取り組みの停滞などの課題も顕在化しています。このため、助け合いの意義や必要性を改めて社会に発信し、環境整備とともに、発信の質とインパクトの向上に取り組み必要性が強調されました。また、子どもから高齢者、障がいのある人や認知症の人を含めた多世代のつながりを重視し、地域共生の実現に向けた働きかけを継続する方針が示されました。加えて、長年の課題であるシニアの地域参加については、退職後のみならず現役世代への働きかけや企業との連携、介護離職防止の観点も含め、モデルづくりと発信に改めて取り組んでいくと説明がありました。続いて、事務局長の白石から予算案の概要について説明。以上の説明の後、理事、監事、顧問と質疑応答が行われ、議案はすべて出席理事全員一致で原案通り可決承認されました。（白石 敏晴）

さわやか活動日記(抄)

各地・各事業の取り組みをご紹介します



ふれあい推進事業

「現場視察研修会 IN 富士宮」 見て聞いて話して、活動を理解

■静岡県

【3月2日】静岡県ブロックでは、今年度はSC情報交換会に連動し、「現場視察研修会 IN 富士宮」を開催した。SC情報交換会で実践発表をしてくれた助け合い推進パートナーの一人、稲葉修氏が店長を務める富士宮市の木工房「いつでもゆめを」への視察を含め、

さわやかインストラクターの木下さち子氏を中心に、県内の助け合い推進パートナーとさわやかインストラクターの鈴木明与氏でオンラインでの打ち合わせを重ねて企画を進めた。

現場視察研修会の副題は「～見る・聞く・話す 活動を理解する一番の近道～」

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SC生活支援コーディネーター

とし、同県内SCや行政職員等を対象に、現場に向いてそれぞれの参加者が肌で感じてもらえる内容を組み立てた。

◆視察先①「木工房 いつでもゆめを」

2013年にスタートした認知症の人が働く場であり、共生の空間。週に2回、9時半～14時まで開き、平均年齢は65歳。研修会参加者は2グループに分かれ、作業の様子や工具の説明、商品の説明を受けた。一見したただけでは誰が認知症で誰が

ボランティアか分からないほど、皆さんがその場に溶け込み自然体だった。途中の休憩時間もお茶を飲みながらおしゃべりに花を咲かせる人、そのまま仕事を続ける人など、それぞれの意思を最優先に共生の空間をつくっている。メイン商品は車椅子でも乗れる体重計だが、ほかにもパズル、フィッシングゲーム等、木目を生かした数々の商品が棚に置かれ、販売されていた。

◆視察先②「平等寺」

月1回の介護者カフェ「ケアラーズカフェともいき」が開催されており、それが終わった後、「ともいき」参加者も利用できる大人食堂（別の部屋で開催）で昼食をいただいた。食材はほとんどが寄付で、食事作りボランティアは檀家の人たちと民生委員が担当している。住職の岩田照賢氏から、お寺でケアラーズカフェの開催を始めた経緯や地域にもたらす効果、さらにはそこから発展してNPO法人を立ち上げ活動している様子が説明された。

◇富士宮市高齢介護支援課
地域包括ケア推進係 認知症地域支援推進員の杉

浦綾乃氏から市の認知症施策として、18年ほど前から制度に特化せず、その人がどうしたいかという視点で「認知症」ではなく「認知症の人」に着目し、人・場所・情報の架け橋となるように活動している状況が説明された。現在認知症カフェは市内に26か所。やり方はバリエーションに富んでおり、ゴルフやソフトボールを一緒にやることや、自動車学校を利用したカフェなどもある。

◇市社協の渡井友洋氏からは、05年に介護予防の1環としてスタートし現在112か所で行われている「寄り合い処」の説明がされた。もともと高齢

者から始まった事業だが、翌年には社協と市との協議で地域住民誰もが対象となり、スタッフも住民。

区民館、集会所のほか、代表者の自宅で行うこともある。寄り合い処が終わる時間に合わせて移動スーパリーに来てもらい買い物支援を行う、スタッフが送迎、社会福祉法人の車両と職員が送迎協力、子育て世代の悩みを聞く等、多世代交流や地域づ

くりの拠点になっている。
* * *

富士宮市は人口12万人強、専門職と住民の連携がしっかりでき、縦割りでなく住民視点で取り組みを進めている様子が参考になった。参加者アンケートには、「町に多世代交流を働きかけていく」「居場所ですら自由、雰囲気や声かけを工夫していきたい」等の声が寄せられた。（上田 恵子）

「協議体のつどい」で1年間の活動を共有

■蓮田市（埼玉県）

【3月3日】「令和7年度蓮田市生活支援体制整備事業協議体のつどい」が開催され、市内各地区の協議体

が参加した。このつどいは、地域での助け合い活動の状況を共有するとともに、今後の取り組みの参考とする



「蓮田市生活支援体制整備事業協議体のつどい」の様子

ことを目的として実施された。

冒頭、山口京子市長よりあいさつがあり、高齢者が住み慣れた地域で安心して

暮らし続けるためには、地域全体で助け合う体制づくりが重要であり、協議体の活動が着実に広がっていることへの感謝と期待が述べられた。

「他市の取り組み」として、桶川市社協の東海林孝守氏、生駒みどり氏を講師に迎え、実践報告が行われた。桶川市は地域包括支援センターが第2層SCを担う体制で、人口規模や高齢化率が蓮田市とも近い。具体的な取り組みとして、農地が多く交通手段が限られる地域では「買物の不便さ」が課題として挙げられ、協議体の話し合いから移動販売の取り組みが始まった。当初は集会所での移動販売会を試行的に実施し、その後、市

と民間企業の連携による移動スーパリーの運行へと発展した。地域の声をもとに小さな取り組みを始め、それが市全体の施策につながった事例として紹介された。

続いて質疑応答が行われた。地域の生の声をどのように把握しているのかという質問に、アンケートだけでは本音が見えにくいためにはサロンや通いの場、体操教室などに足を運び、活動後のお茶の時間などでの何気ない会話を大切に行っていると説明があった。また、イベントやサロンの周知方法についての質問には、自治会の回覧板を活用するほか、規模の小さい集まりの場合には協議体メンバーが近隣住民に直接声をかけるなど、

口コミ等も効果的との回答があった。

次に市内7協議体から1年間の活動報告が行われた。地域の実情に応じた活動が紹介され、語り場の開催による地域課題の共有、自治会単位でのつどいの場づくり、市全体での資源調査、スマホ講座、移動支援の検討など、地域のつながりづくりや助け合いの仕組みづくりが進められていることが報告された。

当財団からは、各協議体が地域の特性を踏まえて着実に活動を広げている点を評価するとともに、住民の声や日常の気づきを丁寧に拾うことの大切さを伝えた。また、スマホ講座や交流会等の活動をきっかけに、地

域のつながりや助け合いへと発展させていく視点や、小さく試行しながら取り組みを進める姿勢の重要性についてコメントした。

■三町が「協議体等合同研修交流会」開催 近隣の仲間として活動を共有

■東彼三町（波佐見町・川棚町・東彼杵町）／長崎県

【3月10日】長崎県東彼杵郡の三町（波佐見町・川棚町・東彼杵町）のSCらが昨年度夏に話し合いを重ね、住民主体によるさらなる地域づくりを推進しようと、協議体や助け合い活動を実践する住民による三町での交流会を企画。この日、「東彼三町協議体等合同研修交流会」として開催され、三町からそれぞれ15名ほど

各協議体の活動には多くの成果が見られており、今後も無理なく継続しながら助け合いの輪を広げてほしいと伝えた。（編集部）

の住民、各町の包括、管轄する県央保健所職員、県担当、波佐見町の担当課長が参加した。当財団にも県のアドバイザー派遣事業により依頼があり、協力した。波佐見町の担当課長によるあいさつに続き、「住民主体で広がるまちづくり」と題して財団が講演した。「最近活動を始めた住民も多いため、活動の基本を押

さえる」「後継者の問題、メンバーが固定化しているなどの悩みをどうするか」等の依頼に応える内容とし、ほかに「具体的なニーズを把握し共有すること」「住民だからできる効果」「助け合いの評価の考え方」等を事例を交えながら伝えた。傾きながら熱心に聞いてくれる参加者もいた。

各町の取り組み発表はSCが担当した。フォーラムや勉強会から助け合い活動創出が広がり出し、最近では小学校区ごとに地域ミーティングを始めている波佐見町。第2層協議体が第3層ごとに座談会を

仕掛けているが、2年ほどで主体的な話し合いになってきており、座談会のニーズから第1層がフォーラムを計画している東彼杵町。手を挙げた人を中心に常設の居場所や企業と連携した買い物支援などの取り組み



「東彼三町協議体等合同研修交流会」での情報交換会の様子

みが生まれれており、助け合
いの広がりからか介護認定
率も下がってきている川棚
町。三町とも違う住民主体
の取り組みが共有され参考
になったと思われる。

情報交換会は、①「今取
り組んでいること」、②「今
後取り組んでいきたいこ
と」について地域ごちゃま
ぜのグループで話し合った。
いくつかのグループからの
発表を受けて、最後に10分
ほど財団からコメントした。
情報交換会後の満足そうな
表情の参加者の気持ちを受
け、町を思い熱心に取り組
んできたことを称えた。ま
た、地域は遠えど目的は同
じ近隣の仲間であること、
今後は見学し合ったりする
のもよいのでは、と話すと

頷く参加者もいた。さらに
「多様な主体の連携に向け
た交流会」の事例を紹介し、
次の実践を提案した。

三町の関係者は、この交
流会の成果を共有し、20
26年度も計画していきま

「生活支援体制整備事業情報交換会」開催 実践と工夫を共有、横のつながりも強化

■埼玉県

【3月12日】「埼玉県生活
支援体制整備事業情報交換
会（北部）」に当財団がア
ドバイザーとして協力した。
県内を南北に分け、SCと
行政担当者が近隣市町村の
取り組み状況を共有し、ネ
ットワークづくりの促進を
図ることが目的。県地域包
括ケア課主催で開催され、

いとのことだった。17年頃
から事業に取り組んでいる
三町でそれぞれ助け合いが
広がり始め、協議体も活発
になってきた。交流するこ
とで刺激し合うよい機会と
なった。（鶴山 芳子）

今回の北部ブロックは約40
名が参加した。

グループワーク①では、
行政、SC等の担当別のグ
ループに分かれてグループ
ワークを実施し、それぞれ

の立場からこれまでの取り
組みや課題について振り返
りが行われた。行政からは、
移動販売の事例が参考にな

る一方で、移動支援が大き
な課題であることが共有さ
れた。また多くの自治体で
担当者が1人に限られてお
り、庁内での情報共有が十
分でないため、複数担当制
の必要性が指摘された。S
Cからは、誰でも参加でき
るサロンの運営や空き家活
用、男性参加の促進等の具
体的な実践例が共有された。
第2層では、移動販売の停
留所設定に苦慮している状
況や、保育園を活用した多
世代交流、ボランティアに
よる移動支援など、多様な
主体を巻き込んだ活動の広
がりが見された。

グループワーク②は混在
グループとし、担当を越え
た議論を通じて今後の取り
組みの方向性が検討された。



「埼玉県生活支援体制整備事業情報交換会（北部）」でのグループワークの様子

住民に過度な負担をかけない関わり方や、第三者からの評価が活動の継続につながる点、男性が参加しやすい場づくり、第2層の立ち上げと充実の必要性などが挙げられた。一方、定例会が報告中心となっていることや、率直な意見交換がしにくい雰囲気といった課題も共有され、関係性の見直しや運営方法の工夫の必要性が示された。

まとめとして、鴻巣市第1層SC高橋康之氏、本庄市第2層SC群馬正敏氏、財団がそれぞれコメントした。高橋氏、群馬氏からは立場の違いにより考え方が異なることを前提にしつつ、互いに役割を持ち、協働して地域づくりを進める重要

性がコメントされた。財団からは、住民主体の視点を忘れず、意欲ある住民が主体的に動ける協議体運営をすることが重要であること。また、行政とSCの連携は単なる情報共有にとどまらず、互いが役割を担うパートナーとして地域づくりを進めるべきである旨をコメントした。

参加者が抱える課題は地域や立場により多様だが、このような情報交換会では自らの関心や課題に応じて他地域の実践や工夫を直接聞き合うことができ、SCにとつて有効な情報収集の機会、活動の意欲向上の場となる。今後もこのような機会が横のつながりを強化しながら、地域の実情に応じた取り組みを深化させていくことがますます重要となる。

（編集部）

「第6回みんながつながる情報交換会 in 宮津」 バスツアーで実践的な学びと交流の機会

■ 京都府

【3月13日】京都府のみんながつながる情報交換会実行委員会主催「第6回みんながつながる情報交換会

in 宮津」が開催され、府内のSCと行政職員など約20名が参加、当財団も協力した。

これまでの情報交換会ではグループワークを中心として交流し、SC同士の横のつながりづくりを進めてきた。回を重ねる中で参加者同士の関係性も深まり、互いの活動に生かされるなど一定の成果が見られている。しかし京都府は南北に細長く、府内であっても日常的な交流が難しいという課題がある。そのため、第6回の今回は京都縦貫道を活用したバスツアー形式とし、最南端の精華町や木津川市から北部の宮津市の取り組みを直接学びに行く機会とし、さらに一歩踏み込み「実践の現場から学ぶ」ことを目的とした。

当日は朝8時に精華町を出発し、途中2か所で参加

者が乗車。バス内でも情報交換しながら移動し、11時30分に宮津市へ到着。宮津で現地合流した参加者と一緒にランチミーティングを行った。

午後からは地区公民館で開催されている第2層協議体「北部生活支援サービス研究会」の会議を見学し、情報交換を行った。

北部生活支援サービス研究会では、自治会ごとの取り組み状況の発表があり、サロン活動等が活発に行われていることが分かった。

意見交換では、参加者からメンバーの選出方法やグリーンスローモビリティの実証実験、ごみ出し支援等について質問があった。質問に対して同研究会メンバ

ーより、協議体は地域の現状を知るための大切な情報共有の場であり地域を知る機会になること。地域に根差した活動を行うために一人ひとりが主体的に取り組み、役割があること。企業との連携も大切だが、住民ができることを話し合うことが大切であることなどが熱く語られた。

今回の情報交換会は、実際の協議体の運営を現場で学ぶ貴重な機会となり、参加者にとって具体的なイメージを持つことができる有意義な内容となった。また、バスツアーとしたことで参加者同士の交流も深ま



「みんながつながる情報交換会 in 宮津」では、宮津市の第2層協議体（北部生活支援サービス研究会）を視察

た、バスツアーとしたことで参加者同士の交流も深ま

り、これまで築いてきた横のつながりがさらに強化された。各市町村で取り組みが異なる生活支援体制整備事業において、他地域の実践を直接学ぶことが刺激となり、今後の活動のヒントや推進力につながることを

期待される。

今後もこのような実践的な学びと交流の機会を継続し、京都市全体の取り組みのさらなる推進につなげることが重要である。財団も伴走していく。

(目崎 智恵子)

第1層・第2層協議体合同研修会開催 実践を振り返り、地域を越え仲間づくり

■村上市（新潟県）

【3月17日】村上市で毎年恒例の第1層協議体と第2層協議体「ご近所ささえ隊」の合同研修会が開催され、当財団はアドバイザーとして新潟県担当者と共に参加した。今回は第1層・第2層協議体と各SCに加え民生委員や自治会長等

にも声をかけて実施。会場にはいつもより多くの参加があり活気ある研修会となった。

同市は第2層協議体を旧町単位5圏域で設置しているが、体制をつくった2016年頃からまちづくり協議会との連携を進めており、

第1層・第2層共に協議体メンバーがまち協やNPO、社協、自治会区長、民生委員、介護サービス事業所、集落支援員などさまざまな組織の人で構成されている。第2層はそれぞれが独自活動をしており、この機会にその取り組みの成果や課題を共有し、26年度の各協議体の取り組みに生かしていくことを目的とした。

開会あいさつ、オリエンテーションに続き、「互近所ささえ隊活動報告」今年度の活動を共有し、来年度の活動へつなげよう！」として各第2層協議体が活動を発表した。

グループワークでは、活動発表の「良かった」「いいね！」と思う点、「こう



村上市「第1層・第2層協議体合同研修会」の様子

してみたかどうか」など自由にアイデアを出し、全体発表を行った。

地域座談会、資源把握によるマップや便帳の作成、移動サービスや地域の茶の間、除雪等の生活支援などさまざまな助け合い活動の創出、まち協との連携した取り組みが定着してきているように感じた。まちづくりと連携することで対象者が全世代型となり、またデータを生かしたり、座談会によるニーズ把握や意識醸成も自然に行われているようである。

財団からは、まち協との連携による活動の定着とその効果、これからの活動として、①家族機能低下による生活支援（移動も含む）の仕組みづくりの必要性、②認知症になっても行かれ常設共生の居場所づくり

と、居場所という拠点を軸にした企業や学校等との連携、③多様な主体の連携、を提案。新潟県主催の「居場所活動大交流会」に触れ、県担当者からも内容を紹介してもらった。さらに、④総合事業を活用し主体的な活動継続につながるように、とコメントした。

同研修会の優れたところとして、グループワークの



社会参加推進事業

高連協 2025年度第2回総会開催

〔3月27日〕高齢社会NGO連携協議会（高連協）の2025年度第2回総会が、大内尉義・清水肇子両共同代表、正会員17団体中15団体（会場3団体・オンライン

方法が光っている。グループは地域ごちゃまぜでつくり、1つの協議体の発表に対してアイデア出しをする。それぞれが自分の地域の実践経験に基づいて振り返る機会となり、新たなアイデアを自分たちの活動に反映できる。さらに、地域を越えて同じ目的を共有する仲間づくりにもなるよい機会だと感じる。（鶴山 芳子）

署名人に岡本憲之氏が選出された。主な議題は1・2026年度事業計画（案）の件、2・2026年度予算計画の件、3・新たな監事選任の件。

ン8団体・委任状4団体）が参加し、当財団会議室で開催された。

第1号議案・議長及び議事録署名人選定の件では、議長に黒水恒男氏、議事録

事選任の件。

1は、(1)政策提言及びそのための調査事業で、第68回日本老年医学会学術集会（今年6月11～13日、神戸国際会議場・神戸ポートピアホテル）の初日に高連協として提言に結びつける方向となり、詳細は4月開催の役員会で決めることとした。2は、日本老年医学会学術集会において高連協の広報ブース出展を検討することを含めて承認された。3は、新たな監事として公益社団法人日本ワイランソロピー協会理事の高橋陽

子氏が承認された。

連絡事項として、個人会員入会者の紹介等があった。その結果、2026年度は正会員団体18団体、特別会員1団体、准会員団体1団体、賛助会員1社、准会員・

個人会員2名となった。

まずは、26年度政策提言事業である6月の日本老年医学会学術集会への高連協としての提言を役員会で至急取りまとめ、成功に導きたい。(玉置 英明)



情報・調査事業

かながわ高齢者保健福祉計画評価・推進委員会 第2回計画評価部会開催 より県民に分かりやすい評価に向けて

【3月6日】「かながわ高齢者保健福祉計画評価・推進委員会 令和7年度第2回計画評価部会」が開催された。議題は、(1)第9期かながわ高齢者保健福祉計画(令和6年度)主要施策の評価(案)について(2)第10期かながわ高齢者保健福

祉計画ロジックツリー(案)について。

部会長である黒木淳氏(横浜市立大学教授)の進行で、副部会長の関ふ佐子氏(神奈川大学教授)、郷原達也氏(横浜市高齢健康福祉課計画調整係長)、陶山茂氏(秦野市高齢介護課

課長)と共に、地域団体の立場で当財団も議論に参加した。

(1)は、第9期計画(R6年度)における主要施策の評価(案)の妥当性について。前回12月に開催された部会での議論等を踏まえ、評価項目や主要施策と柱との関連性がさらに整理され、「定性的な評価の反映」や定量的評価や定性的評価のウエイト付けを記載するなど資料が整理されている。すべての委員から「だいぶ分かりやすくなった」との意見が出され、「課題感を明示したほうがよいのではないか」など、さらに分かりやすくするための追加意見も出された。

(2)は、第10期計画におけ

るロジックツリー(案)について、追加や削除の項目や適切性などについて意見を出し合った。「活動指数と目標(中間アウトプット)の関連性を改善する方法を検討しては」「市町村の実情や地域性に応じて、県が支援の役割を果たしていくことが大切では」「多様な主体の連携の必要性」等の意見が出た。

最後に黒木部会長から「目標(アウトプット)を住民目線で捉えるか、提供主体の事業者目線で捉えるかの2つのベクトルがあり、成果(アウトカム)は受益者目線であるべき」「ロジックツリーが複雑だと県民にとっても分かりづらくするため、シンプルな構造が

望ましい」という意見などでまとめられた。

これらの意見は3月開催の親部会「かながわ高齢者の

保健福祉計画評価・推進委員会」で諮られる。

(鶴山 芳子)

「地域づくり加速化事業」第3回運営委員会 より良い事業に向け議論

【3月13日】厚生労働省「令和7年度地域づくり加速化事業」の3回目の運営委員会が会場とオンラインのハイブリッドで開催され、当財団も会場に参加した。

議題は、(1)伴走支援の最終報告 (2)ブロック別研修会 (3)事業評価 (4)支援パッケージ(ハンドブック)の改訂 (5)生活支援共創プラットフォームについて。資料を基に事務局から説明があり、委員長の大坂純氏(東

北こども福祉専門学院副学院長)の進行により、事業をより良くしていくため各委員から活発に意見が出された。

2025年度、メインの伴走支援は22地域において3回ずつ行われた。これについて資料が共有され、いくつかの地域について報告があった。その上で、「次年度に向けて伴走支援方法、進め方の見直すべき点」「都道府県主導型の振り返

り」などについて意見交換した。伴走支援は3回行われるが、「その後の継続の重要性や都道府県等の継続支援」等の意見が出された。財団からも「継続支援の重要性に加え、支援の中で『住民の声』を聴くことが

目的を明確にすることにつながるので、地域をよく知るSCや包括などと住民のニーズを共有することも大切ではないか」などと発言した。東北厚生局は継続支援をにらみ、アドバイザーを全国レベルのアドバイザーと地元アドバイザーという組み合わせにして継続支援の体制をつくるなど、工夫している報告があった。

本事業は令和4年度から「地域包括ケアシステムの

深化・推進に向けた広報・伴走支援」を目的として実施されており、運営委員会では伴走支援やブロック別研修、事業評価をはじめとするさまざまな取り組み状況を共有しながら、より良い事業となり地域づくりが進むように運営委員会でも議論を重ねてきた。今回も各取り組みの報告やアンケート、事業評価などから着実に成果が生まれていることを実感する機会になった。

一方で、総合事業等を生かした地域づくりに悩んでいる自治体はまだまだたくさんある。この事業から生まれたノウハウや『地域づくり支援ハンドブック』、また『生活支援共創プラットフォーム』などの活用が各地

で進むことがこれからの課題でもある。26年度も事業

は継続される。

(鶴山 芳子)

「広がれボランティアの輪」連絡会議 今日的なボランティアの価値を考える

【3月16日】「広がれボラ

ンティアの輪」連絡会議

(以下、「広がれ」)の勉強

強会プロジェクトチーム

(以下、PT)として、企

画の検討を重ね、今年度は

「今日的なボランティアの

価値を伝えていくために

「私たちが一緒にできるこ

と」をテーマに、会場参

加とウェブ参加のハイブリ

ッド形式で勉強会を開催、

全国から80名強が参加した。

また、今回も双方向きを意

識して、ウェブ会議システ

ム「slide」を用いて

質問・意見を受けながら進

めた。

△基調講演V

原田正樹副会長の開会あ

いさつに始まり、PTメン

バーの一般社団法人SDG

s市民社会ネットワーク

(SDGsジャパン)の新

田英理子氏から、「広がれ」

が2024年9月と25年4

月に発表した提言の紹介等、

趣旨説明を行った後、認定

NPO法人日本ボランティ

アコーディネーター協合理

事・事務局長の後藤麻理子

氏が「変わる社会と変わら

ないボランティアの価値を
考える」と題して基調講演
を行った。

人口構成の変化による担

い手不足や経済的格差等の

環境変化や帰属意識の低下

傾向、また、非日常的なイ

ベントや趣味の延長的な活

動、単発・期間限定等のビ

ュツフェ形式の活動への参

加・関心の高まりなど、市

民の意識の変化が説明され

た。その上で、ボランティ

アコーディネーションの目

的は「市民社会の創造」で、

目指す社会として「ボラン

ティアコーディネーター基

本指針」が説明された。

「目指す社会」とは、一人

ひとりが自分の力を生かし

協働して社会課題の解決に

取り組み、自由に社会づく

りに参画し、結果のみでな
く決めるプロセスを大切に
できる社会である。そして

ボランティアは市民社会を

構築する重要な担い手で、

活動を通じて自らの可能性

を見いだすことができ、安

価な労働力ではなく無限の

創造力であるといったコー

ディネーションの視点も紹

介された。

△パネルディスカッションV

後半は、PTメンバーの

日本YMCA同盟の田口努

氏コーディネーターの下、後

藤氏がコメントーターに加

わり、企業、実践者、中間

支援団体という異なる立場

の3名によるパネルディス

カッションを行った。

企業の立場からは、サン

トリーホールディングス株

式会社CSR推進部課長の須崎渉氏が登壇し、社員の多様な活動への参加から寄付・寄贈等による参画まで、ボランティア活動を促進している状況が説明された。ボランティア活動は社員が豊かに生きていくためのものだと位置付け、ボランティア募集サイトを活用したり、活動に予算を付けて交遊費等の補助を行ったり、ボランティア休暇制度を採り入れる等、積極的に応援している様子が紹介された。

実践者の立場からは、NPO法人国際ボランティア学生協会所属の大学3年生・高橋芽生氏が登壇し、同協会のビジョンや5つの活動である国際協力、環境保護、地域活性化、災害救援、

子どももの教育支援の内容が紹介された。そして自身がボランティアを始めたいきっかけや実際の活動等が、「学生だからできること」として紹介された。「私でも役に立てることがあるかもしれない」と一歩を踏み出し、被災地で高齢者宅などを訪れる中で、一方通行ではない助け合いを実感し、共に生きる社会の大切さを感じていると話した。

京都大学大学院社会的インパクト評価学講座 シンポジウムに清水理事長が登壇

既報のとおり、当財団では今年度、京都大学との共同事業として「助け合いの社会的インパクト評価」に関する研究を開始することとなりました。

去る3月2日、京都大学で標題講座の設立1周年を記念したシンポジウムが、会場とオンラインのハイブリッドで開催され、当財団の清水肇子理事長も講演とパネルディスカッションに登壇しました。

<主なプログラム> (敬称略)

開会挨拶 京都大学大学院医学研究科 社会疫学分野教授 近藤 尚己

講演 1 「講座のプロジェクト紹介」

京都大学大学院医学研究科社会的インパクト評価学講座
特定准教授 高木 大資、特定助教 石村 奈々・川内 はるな

講演 2 「助け合い活動の社会的価値 共同研究に向けた期待」

公益財団法人さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

講演 3 「みどころウォークを使ったVR体験の社会的インパクト評価への期待」

大日本印刷株式会社マーケティング本部 主席研究員 磯田 和生

パネルディスカッション

司 会：京都大学社会的共通資本研究部門 特任教授 近藤 克則

パネリスト：高木 大資・清水 肇子・磯田 和生

超高齢社会において心豊かな生活をどのように支えていけるのか、住民主体の助け合いが社会にもたらす価値や影響について今後調査研究を深めていきます。

中間支援団体の立場からは、一般社団法人環境パートナーシップ会議のパートナーシッププロデュース部マネージャの江口健介氏が登壇した。環境ボランティアはごみ拾い、里山保全、生物調査など現場のある実践活動から、情報発信やキャンペーンへの参加といった取り組みまで多岐にわたるが、格差や貧困等社会全体の余裕のなさにより活動規模は縮小しており、経済合理性と環境保全が天秤にかけられ、市場化が進行している状況が説明された。環境保全活動は自らの生活基盤を守ることであるのは当然のことで、それを企業や行政任せにするのではなく、住民参加・住民自治に変え

ることがボランティアの価値であり、地域主体の協働の起点となると述べた。

3名の発表後、参加者からの質問・意見も交え、さらに議論を深掘りした。コーディネーターの田口氏が、「行政や企業は体の中の動脈といわれ、たくさんインフラをやってくれるが、NPOや市民活動などのボランティアは手の届かない先端、あるいは末端のところまで一つ一つの小さなニーズに答えていける。毛細血管が具体的に小さなニーズに答えて、社会を変えていくことがとても大きな力になっていくし、動脈と連携して社会をより良くしていく仕組みをつくっていかなくてはいけない」と感想

を述べた。

* * *

最後に総括として上野谷加代子会長が、「ボランティアの価値はその時代を生きている人間がつくっていくものであり、その最大公約数を『広がれ』としてつ

くっていききたい。社会を変えていこうという熱い思いを、一人ではなく私とあなた、そしてみんなが持つてくれる社会にしていききたい」と熱くまとめた。

(上田 恵子)



所 務 事 務 だ よ

●財団も新年度を迎え、今は本年度実施事業を皆で着々と進めているところ。全国交流フォーラム、オンラインフェスタ等々、役立つ情報を発信して皆様と一緒に新しいふれあい社会をまた一歩前に進めていきたい。本年度もよろしく願っています。

シンポジウムに高連協共同代表として 清水肇子理事長が登壇

さわやか福祉財団が事務局を務める高齢社会NGO連携協議会（高連協）が、6月に神戸市で開催される第68回日本老年医学会学術集会において、下記の通り一般社団法人日本老年医学会と共催で合同シンポジウムを行います。

高連協の共同代表である当財団の清水肇子理事長らが登壇し、高連協の活動を踏まえながら地域とのつながりや社会実装をテーマに講演いたします。

非学会員の方でも当財団経由でお申し込みが可能ですので、関心のある方はどうぞご連絡ください。

第68回日本老年医学会学術集会

開催日程 6月11日（木）～6月13日（土）

場所 神戸国際会議場・神戸ポートピアホテル
(ポートライナー「市民広場」駅下車)

合同シンポジウム

「高齢期のwell-beingをどう実現するか～地域との連携とその可能性」

◆日時 6月11日（木）16:45～18:15

◆場所 神戸ポートピアホテル第7会場「借案1 本館B1」

◆登壇者

座長

大内耐義氏 高連協共同代表・国家公務員共済組合連合会虎ノ門病院名誉院長

清水肇子 高連協共同代表・公益財団法人さわやか福祉財団理事長

パネリスト

浦野友彦氏 国際医療福祉大学老年病学講座

「高齢期のwell-beingを支える地域連携の実践ー栃木県北部での取り組みから」

石田路子氏 NPO法人高齢社会をよくする女性の会・高連協

「3C・高齢期のwell-beingを実現するキーワード～集う（come together）
・紡ぐ（compose）・創り出す（create）～」

中村順子氏 認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸理事・ファウンダー

「地域活動でのつながりづくりー神戸の取り組みから」

※日本老年医学会学術集会の詳細は、下記の高連協ホームページからご確認ください。
ご参加者は、上記シンポジウムを含む3日間すべてのプログラムをお聞きいただけます。
<https://www.janca-jp.com>

◆参加申込締切 6月4日（木）正午 詳しくは、
下記担当へお問い合わせください。

お問い合わせ

さわやか福祉財団社会参加推進チーム・高連協事務局 玉置

電話 (03) 5470-7751

メール janca.jimu@sawayakazaidan.or.jp (高連協事務局)

「地域助け合い基金」 2026年度ご応募について

2020年5月の開始以来、「地域助け合い基金」は丸6年を迎えることとなりました。

コロナ禍をきっかけに、ご寄付が原資である「地域助け合い基金」を立ち上げ、これまで本当に多くの皆様からご支援をお寄せいただき、また熱心なご応募により、全国の地域助け合い活動の推進にご活用いただいておりますことを、改めて感謝申し上げます。

この間、助成額は2億円を越え、全国1400件を超える活動を支援させていただきました。その取り組み内容については、当財団ホームページでご報告し、また本誌でも毎号その一部をご紹介している通りです。

今年度の「地域助け合い基金」ご応募については、4月に当財団ホームページおよびご応募ページでもご案内のとおり、6月中をめどに新たな募集要項による応募を開始いたします。詳細は、当財団ホームページおよび本誌等で改めてご案内させていただきます。

さわやか福祉財団は、住民主体の地域づくり、尊厳ある暮らしの仕組みづくりを全国で強力で支援しております。その基盤となるのがまさにお互い様の助け合い活動です。

支援の手が届かず孤立が深刻な社会問題となる中、さわやか福祉財団として、全国の助け合い活動の取り組みをさらに強力で推進してまいります。

どうぞ今後とも応援いただきますようよろしくお願いいたします。

お問い合わせ：「地域助け合い基金窓口」
tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

みんなのひろ場

「新・ひとりごと」
生き方に勇気もらえる

酒井 勝男さん 83歳

埼玉県 埼玉県

3月号、丹理事の「新・ひとりごと」。「友だちことば」が勉強になりました。今後の近所つきあいの仕方について心がけたいと思っています。いつも暖かい一言ありがとうございます。自分の生き方に勇気をいただいております。

「ことばよりことば」とも言えますが「ことばをつなぐことば」にも注目していただき、ありがとうございます。地域のつながりは身近なところから。「友だちことば」を活かしていただけるとうれしく思います。

(丹)

泉の会の活動に感動

みはやさん

3月号「活動の現場から」のNP O法人泉の会の方が「夜、1人だと寂しい」と言われれば同じ部屋で寝た、と書いてあって感動しました。なかなかできないことだと思えます。生活困窮者の方は、子どもの頃の家環境が大きく影響しているということですが、どんな家環境ですか？ 子どもの支援はお年寄りに比べて成果が出にくい（コスパがよくない？）と他で見たことがあります。なぜか知りたいです。

今後、子どもの支援について取り上げてほしいです。

質問は担当者に伝えます。ありがとうございます。子どもを地域で育むという視点の中で発信していければと思います。

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。ぜひ皆様の声をお寄せください。

送付先

〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団『さあ、言おう』編集部宛
FAX: (03) 5470-7755 E-mail: pr@sawayakazaidan.or.jp

投稿募集

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人 年会費	Aコース	10,000円
	Bコース	3,000円
法人 年会費 (1口)	Aコース	100,000円
	Bコース	20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金(硬貨)でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

「いこうぜ！みんな キラキラのあしたへ ゴーゴゴー！」

5月5日(火・祝)～11日(月)は「こどもまんなか 児童福祉週間」です。

表紙絵から

はり絵・
池田げんえい



「薫風」

編集後記 ●「活動の現場から」は、4月号に続き千葉県東金市からです(P4～)。

●「子どもと一緒に地域で輝こう」は、社会福祉法人の「赤ちゃん職員」。みんなが笑顔になる取り組みです(P10～)。●肘井哲也さんの「シリーズ 定年、その先へ」がスタートしました。ご期待ください！(P18～) ●毎年5月5日から1週間は「こどもまんなか児童福祉週間」です。今年度の標語は、山下旭陽さん(6歳)の作品です。

助け合いを
広げよう!



山田 幸恵

「子育て中のつぶやき」

育児がとにかく孤独だった

そんな時、ビジター*さんが来てくれた

親戚のように親しみやすくて

話せないことが話せた

すごく共感してくれて嬉しかった

独りで頑張らなくてもいい

そう思えたら心が軽くなった

頼ってもいいと思えることが

心のお守りになった

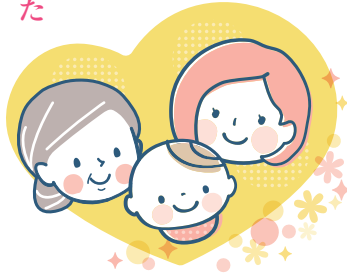
子どもが褒められているのを見て

この子をもっと褒めてあげようと思った

育児の孤独も高齢者の孤独も、つらさの根っこは同じかな…

誰かがちよっと寄り添ってくれるだけで

生きていけるんじゃないかな…



*子育て経験者のボランティア

●認定NPO法人ホームスタート・ジャパン理事・事務局長

「すべての子どもに幸せなスタートを！」

ホームスタートは地域で子育て・育ちを支える訪問ボランティア活動です。上記の文章前半は、利用者アンケートからの抜粋です。全国の活動状況などはコチラでどうぞ。www.homestartjapan.org

（おま） 5月号

通巻393号 2026年5月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい

編集担当 塩瀬潔泉

取材協力 七七舎

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子

発行元 公益財団法人さわか福祉財団

〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階

Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755

E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp

https://www.sawayakazaidan.or.jp

Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

どなたでも
ご視聴
できます

一般財団法人長寿社会開発センター 研究セミナーと連携

さわやか福祉財団提供動画

「本人らしい生活をするために どうする? 地域との連携」

当財団では、一般財団法人長寿社会開発センターのご協力を得て、同センターが実施しているオンライン「研究セミナー」お申し込み者向けに、地域との連携を考えるための動画を併せて提供させていただいています。

3回目となる今回の概要は、以下の通りです。「研究セミナー」は定期的を実施され、主に、居宅介護支援事業所、地域包括支援センター、在宅サービス事業所、基幹相談支援センター、行政関係者向けに業務の参考となるテーマが取り上げられていますが、興味・関心がある方ならどなたでもお申し込みが可能です。本誌読者の皆様も、この機会に気軽に学びを深めてみませんか? ご参加をお待ちしています。

令和8年度 第1回長寿社会開発センター研究セミナー

テーマ:「『困った』が『なるほど』に変わる!

うつ病、双極症、パーソナリティ症のある人への対応のコツ」(約90分予定)

講師:植田 俊幸氏 (鳥取県立厚生病院・精神保健福祉センター 医長)

受講料:無料

実施方法:オンデマンド配信 (YouTubeによる限定公開。期間中何度でも視聴可能)

配信期間:2026年6月10日(水)10時~7月10日(金)17時まで

(研究セミナーお申し込み者限定 さわやか福祉財団 提供動画)

テーマ:「本人らしい生活をするために どうする? 地域との連携Ⅲ」(約30分予定)

講師:熊谷 美和子氏 (NPO法人たすけあい平田 理事長)

※研究セミナーと同様に、無料で配信期間中何度でも視聴可能です。

お申し込みは
こちら

一般財団法人長寿社会開発センター サイト内

(調査研究/研修会・シンポジウム)

<https://nenrin.or.jp/research/symposium.html>



お申し込み締切:6月5日(金)17時まで

配信の詳細は、上記お申し込み画面でご確認ください。

内容に関する問い合わせ先:公益財団法人さわやか福祉財団 (上田)

電話:03-5470-7751 FAX:03-5470-7755 E-mail:seminar@sawayakazaidan.or.jp

申込に関する問い合わせ先:一般財団法人長寿社会開発センター 調査研究開発部 (田中・古里)

電話:03-5470-6767 FAX:03-5470-6763 E-mail:kenkyuu2@nenrin.or.jp